

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2020年8月8日

文責：JUN

大切なのは時間数とオンライン？ 学びの質は？

1. 授業時間数確保に走る危険性

ええっ！ それって、授業時間数だけのことじゃないの？

夏休み期間を縮小して授業を行う学校稼働日を増やす、土曜日に授業を行う、通常、一日6時間の授業を7時間目にも行う、こうすれば、2か月休校で遅れていた分はほぼ取り戻せる、もちろんこれらのすべてを行うということではないけれど、どこの市町村でもこのような対策を講じているのです。なかには、7時間目まで授業をすると帰宅が遅れるからということでしょうか、授業の1単位時間を減らす方策までとろうとしているところまであります。

冒頭に掲げた一言は、このような方策を知らされたある教師が、それも仕方がないと思いつつ、溜息交じりについ口に出してしまったものなのです。

学校教育がこういった方策を考えなければならない状況であることはわかっているのです。とにかく、まずは時間数を確保しなければならないのですから。しかし、そうは思うものの、今、自分たちは授業時間数だけでは考えられない多くのことに直面している、そういう思いが強くなったからではないでしょうか。

子どものことをよく見ている教師ならだれもが感じたことですが、休校明けの子どもたちの状況は子どもによってかなり異なっていました。学校から届けた学習課題がどの程度やれていたかということだけでなく、なかには生活リズムが乱れていた子ども、学ぶ意欲を減退させていた子ども、学校に行きたがらなくなった子どもがいたりしたのです。休校が学年始めだったのも子どもたちの状態に影響を与えたかもしれません。学級編成替えにより子ども同士の関係も担任教師とのつながりも築かれていなかったからです。

教師たちは、何よりも、そういう子どもたちの状況に対応し、教室をみんなで生活する場、だれもが安心して学べる場にしなければなりません。それはいつもの学級経営以上の繊細さと時間を伴うものでした。もちろん、感染症対策を怠ることはできません。教師の一日は肉体的にも精神的にもハードなものになったのです。そういうことを抜きに時間数だけで語られることに違和感を抱いたとしても不思議はないでしょう。

しかし、私が心配するのはそれだけではありません。時間数確保が示されることにより、教師たちの意識が学習の遅れを取り戻すことだけに行くのではないかという危惧を感じたのです。もちろん、私のような危惧を感じている教師もいれば、感じていない教師もいるでしょう。けれども、そのどち

らの教師も、感じている教師ならわかっているが、感じていない教師なら知らない間に、ある状態に追い詰められてしまう危険性がある、そう思うのです。その状態とは、授業が、早くわからせるための教え込み状態、つまり悪しき「一斉指導型」になってしまうことです。

本年度実施になった（はずの）新学習指導要領には、「児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」と記されています。つまり、ここに述べられているのは、「児童生徒が自ら取り組む授業、学ぶ過程を大事にした授業を行いなさい」ということなのです。それは教師が教え込む「一斉指導型」とは真逆のものです。教えることを急ぐということは、その真逆のものに陥ってしまう危険性を孕んでいるのです。

教師には、第二波が来ていつまた休校になるかもしれないという不安があります。現に、ここに来て新規感染者数が増加の一途を辿り、感染者の突出している東京都だけでなく大阪、愛知、福岡、沖縄などが急増するなど全国に拡散し、5月25日に21名だった全国の感染者数が、1か月後の7月23日には全国合計981名にまで達し、その1週間後の29日には1000名を超え、31日には1581名にまで増えました。なんと75倍です。PCR検査数を増やしたから増加したという側面もありますが、そうやって済ませることはできません。家庭内感染、感染経路不明の市中感染が増加し、感染する人の年齢層も上がるなど、その増え方は尋常ではありません。県独自の緊急事態宣言も出されました。

それよりも教師にとって不安なのは、子どもや教師の感染事例もいくつも出てきていることです。そういった学校では、クラスターになって子どもにも教師にも感染が広がるのではという不安感に包まれることでしょう。そして、濃厚接触者に対するPCR検査、校内の消毒等を実施しなければなりません。そして、数日間、休校にする必要があります。そうなる可能性は、今や、どこの学校にもある、だからいつ休校になるかもしれない、そう考えざるを得ないのです。

教師たちは、そのような状況で授業をし、しかも、「学習の遅れ」ということが大きな話題にされているのですから、積み残してはいけないと思うのが自然です。こうして新学習指導要領とは真逆の悪しき「一斉指導型授業」にはまり込む危険性に直面しているのです。

もしそうなったら、学力格差は必ず広がります。そして、それ以上に深刻化するのは学びの「質」の低下です。教え込まされる学習は、子ども自身による学びが脆弱になり、子どもが考え取り組む過程がおろそかにされるのですから、「深い学び」にはならないからです。それでは、Society5.0時代が求めている思考力・創造力が育つことにはなりません。学ぶ意欲も減退するにちがいません。

学校再開に際して授業時間確保に走るのはやむを得ないことです。けれども、今は再開して2か月になります。生み出した授業時間でどういう学びを目指すべきなのか、そういう内容面の発信がいろいろなところから出てきてもよさそうなものですが、それが一向に出てきません。

その煽りを受けるのは子どもたちです。こうなったら、学校側つまり教師から発信するしかありません。どの子どもも学ぶ喜びが味わえるよう、必要以上に急ぐことなく、授業の「質」の向上に努めよう、教え込むのではなく、すべての子どもが嬉々として取り組む学びこそこの困難な時代を生きて

いく資質を育てるのだと…。

ところが、6月以降聞こえてきたのは、「オンライン授業」こそが新しい時代の教育の姿だというもので、教材の精選だとか、飛沫汚染を心配しなくてもよい対話的学びのあり方だとかいう方策ではありませんでした。休校で授業を受けられないという状況で、家庭にいても学ぶことのできる「オンライン」がもてはやされたことから、そういう風潮が強くなり、国も、すでに計画していた「3クラスに1クラス程度のコンピュータ整備」を目指す「GIGAスクール構想」を前倒しして、2020年度中に「1人1台端末」の整備を打ち出すこととなったのでした。しかし、それが、休校時のイメージのままの「オンライン授業」であったとしたら、それは悪しき「一斉指導型」と少しも変わらないことになります。それが新しい時代の理想像だなどととんでもない話です。

2 「オンライン授業」で「対話的学び」を

休校中に行われていた「オンライン授業」は、教師のメッセージを届ける、取り組む課題を示す、課題の考え方を説明するなどといった、教師からの一方向のものが多かったのではないのでしょうか。画面がつながっている状態で、子どもが教師に質問したり、それに教師が応えたりする双方向性は、一部の学校でしかできていなかったように思われます。それよりも、まったく「オンライン授業」を実施していない学校がたくさんあったというのが事実だったようです。それは仕方のないことでした。日本の学校のICT化はあまり進んでいなかったからです。

そういうこともあって、世論は、学校のICT化を早く整備すべきだという盛り上がりを見せ始めました。そして、前述したような「GIGAスクール構想」が前倒しされることになったのです。

今、コロナ禍は再び危険な状態になってきています。そういうことから考え、学校のICT化を急ぎ、たとえ一方向性であったとしても「オンライン授業」ができるようにすることは必要なことです。しかし、それは、コロナ禍に落ち着きが生まれた時も、一方向性のままでよいということではありません。それでは、教師の教えたことを教師から教えるという域を超えることはできないからです。新学習指導要領で求めている、子どもが主体的に取り組む「探究的学び」にはならないからです。にもかかわらず、一方向性のままの「オンライン授業」が蔓延することになったら、日本の子どもの学力は時代遅れのものになってしまうでしょう。

このことは、こうして私が述べるまでもなく、何人もの識者が警告を発しています。「オンライン授業」は双方向性のものにすべきだと。

しかし、その双方向性も、教師と子ども一人ひとりとの個別的な双方向性であったら、「探究的学び」は行えないでしょう。そもそも、教師が何人もの子ども一人ひとりと個別にオンラインで対話すること自体不可能に近いことです。仮に、児童生徒数の少ない学校で個別的な対話が可能だったとしても、子どもが対話する相手は教師だけなのですから、子ども自身の思考による、子どもが発見する学びにならず、教師の判断を仰いだり、教師の示唆を受けたりするだけのものになってしまう可能性が高いのではないのでしょうか。

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」への授業改善を図る、というように示されていますが、その文言でもわかるように、子どもの探究的学びには「対話的に学ぶこと」が不可欠な

のです。その「対話」の相手は、教材、題材であり、自分自身でもあります。しかし何よりも大切な対話の相手は他者です。教師も他者の一人ですが、それよりも大事なものは「仲間」です。子どもが思考し探究する学びにおいて仲間とどう対話するかが極めて重要なのです。探究するとき、わからなくなったり、行き詰ってしまったりするのは必定です。そういうとき、ともに考えたり、尋ねたりできる仲間がいることで、どの子どもも学びを持続することができるからです。仲間との対話のない学びは、すべての子どもの学びにならないばかりか、どの子どもにも学びの深まりをもたらさないと考えるべきです。

そのことが、マスコミを盛んににぎわせているオンライン授業加速説において、こそっと抜け落ちているのです。一方向性のままのオンライン授業や、双方向性であっても仲間との対話をほとんど行わないものであったら、これからの教育を担うものになれるはずがありません。「オンライン授業」というだけで、未来の教育の理想像のように考えてしまってはならないのです。

しかし、オンラインでも、仲間との対話を行うことはできるようです。もちろん私自身も経験していないし、そういうオンライン授業を見たこともありません。けれども、ある社のシステムには、いくつかのグループにわかれて対話ができる機能が備えられているということなのです。

伝え聞いたことで述べれば、それはブレイクアウト・ルームという機能だそうです。もちろんバーチャルですが、いくつかのルームが存在していて、オンライン参加者が別々のルームに入り、同じルームに入った者同士で対話することができるし、教師はそれらを統括し、どのルームの状況もとらえられるので、場合によってはその対話に割って入ることもできるというのです。

これなら、全員が揃った教室における実際の授業と変わりありません。それどころか、同時に進行しているいくつかのグループの対話の内容を教師がとらえることは難しいのですが、オンラインだと動き回らなくてもよい分、かなり可能なのではないかと考えられます。もちろん、一人ひとりの子どものちょっとした動きとか、戸惑いとか、状態の変化まではオンラインではとらえきれませんが、そこは一長一短だと考えればよいように思います。

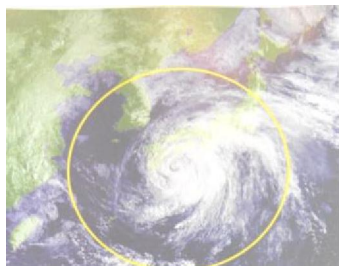
つまり、「オンライン授業」には、そこまでの可能性があるのです。そういうところまで考えた「GIGAスクール構想」にしてほしいと思います。伝え聞いたところでは、この構想の中に「校内の高速大容量の通信ネットワークの整備」が盛り込まれているそうです。たぶん、ブレイクアウト・ルームを活用して、多くの学級で「オンライン授業」を行うには、この通信ネットワークの整備が欠かせないと思われます。政府の方針でそれが実施の方向だということですからありがたいことです。そういうこともあり、マスコミに流されるのではなく教師たちこそが、「対話的学び」のできる「双方向性のオンライン授業」を目指す意思を持ってほしいと願っています。

大切なのは、授業時間数ではありません。「オンライン授業」をすればよいということでもありません。その授業において、どういう学びを繰り広げるかという「内容」が大切なのです。

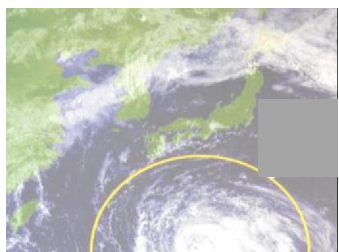
教師ではない人たちには、そこまでのことはわからないかもしれません。であるとしたら、学びの担い手である教師側から、こういうことなのだ発信すべきなのかもしれません。短くなった夏休みはあっという間に終わります。束の間の期間に疲れ切ったからだを心をとめるとともに、「対話的学び」への方策を練りましょう。飛沫感染させない方策がきっとあるはずだと考えて。

3 こんな「探究的学び」が行われている

各地の学校は、ここまで述べてきたような状況に置かれています。ですから、教師たちが私の危惧するような状態に陥っても仕方ありません。にもかかわらず、少しでも、子どもの学びが深まる授業をと務める教師がいるのです。そこには教師としての矜持が感じられます。

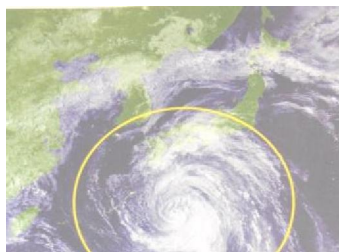


6月に参観した5年生の理科の授業。授業を初めてすぐ、S先生が子どもたちに示したのは左の4枚の写真でした（本稿への掲載に際して画面をぼかしました）。そして、「これは台風がやってきたときの雨雲レーダーの写真です。この4枚を時間の順に並べてみよう」という課題を出したのです。

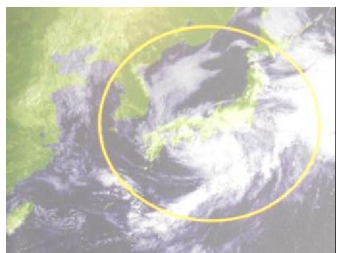


この授業の題材名は「天気の変化と情報」の中の「台風と気象情報」で、ある指導書の説明を見ると、「天気の変化の仕方を調べるための気象情報の集め方を考える」が目標になっていました。

S先生は、気象情報からどのように天気の変化を読み取るかということ、子どもたち自身に見つけさせようとしてこの課題を出したのです。



子どもたちは、1人ひとりに配られた写真を手に持って考えています。そして、気づいたことを横の友だちと確認し合っています。すると、S先生は、「ただ順番に並べ替えるだけでなく、どうしてその順番なのか考えるんだよ」と言います。すると、子どもたちの語り合う内容が変わりました。台風の雲が日本列島のどの辺りにあるか、雲のかかり具合によってどの辺りの風雨が激しくなっているか、だから、こういう順番なのだということ。それは、まさに、情報から天気の変化を読むということでした。



気象情報としては、雨雲レーダーや天気図のほかにアメダスもあります。S先生は、この後、すぐに結論的なことを教えるのではなく、さらにこの4枚の写真と同じ時刻のアメダスの図も資料として配付して考えさせました。とにかく、さまざまな情報資料を読むという体験をさせたかったからでしょう。

この授業は、もちろんコロナ禍において行われたもので、子どもたちは全員マスクをつけ、机と机は以前よりかなり離していました。それでも、子どもが思考し発見する「探究的学び」を実現したいと思えば、こういう授業になるのです。やはり課題が大切です。

7月に参観した2年生の算数「たし算とひき算のひっ算」の授業も、課題が子どもの探究的学びを引き出しました。

授業者のO先生が準備した課題は右のように2

問だけでした。演算の授業だと、いくつかの問題を並べて示し、次から次へと解かせる授業になりがちです。そこには、数多く当たればそれだけ力がつくという迷信のようなものがあるからでしょう。では、なぜO先生は2問だけで授業をしたのでしょうか。

それは、機械的にいくつかの問題に当たるよりも、この2つの問題に対して、どうすれば□に当てはまる数がわかるのか、そしてそれはなぜなのかと考える

ほうが、学びが深まると考えたからにちがいありません。さらにもう一つ、じっくり取り組む雰囲気、算数の苦手な子どもに焦りを感じさせないばかりか、わからなかったら尋ね、尋ねられたら応じるといった学びのつながりを生み出すことができるということもあったのだと思います。

この課題の場合、どう考えてよいかわからないでいる子どもへの対策と、単に□に入る数字を見つけるだけで終わらないで「深い学び」に至るための方策という二つの大切なことが存在しています。

例えば、課題②の場合、一の位だけ見て、「7から何かを引いたら、7よりも大きい数である9になる」ということがわからない子どもがいるのです。そういう子どもには繰り返し下がりを読み起こさなければなりません。それには、数え棒とかタイルとかいった半具体物による操作が必要です。それがわからないでいる子どもへの対策です。

その課題②の一の位の□は「8」になるのですが、□に「8」が入った式をじっくり観察させれば、「 $17 - 8 = 9$ 」「 $17 - 9 = 8$ 」というひき算と「 $9 + 8 = 17$ 」というたし算が裏表の関係にあることがわかってくるでしょう。この足し算とひき算の裏表の関係に気づくということは、2年生として「深い学び」だと言ってよいのではないのでしょうか。

こうして考えてみると、ただ、類似問題を数多くやらせるのではなく、この授業のように少ない問題で、どの子どもできるようにしていったり、深い学びに入ったりしていくほうが、子どもの数学的思考力を高めることになるのではないかと考えられます。

もちろん、この授業も、コロナ禍において、マスクをつけて行われたものです。

ここに紹介した二つの授業は、ともに、私が懸念を示している「教え込み」の授業ではありません。単に、学習の積み残しを出さないための急ぐ授業でもありません。それぞれの学校がこれまでに行っていた、子どもによる「探究的学び」を実現しようと取り組まれたものです。2人の先生は、いくつかの感染症対策を行いながら、子ども一人ひとりの不安定なメンタル面にも気を配りながら、それでも、なんとか時間を見つけて教材研究をし、このような授業を行っているのです。

今は、時間をかけて没頭するほどの授業研究をするゆとりは教師たちにはないでしょう。教師や子どもが感染したというニュースがマスコミをにぎわわせるようになり、常に油断のできない状況になっているのですから。それでも、目の前の子どもたちのその学年の学びは今しかない、だからなんとかして良質の学びができるようにしたい、その気概が教師たちを支えているのです。教師たちは、授業時間数が足りるかどうかがより高い次元で授業に向き合っているのです。

課題①	課題②
$\begin{array}{r} 7 \square \\ - \square 8 \\ \hline 14 \end{array}$	$\begin{array}{r} 4 \square 7 \\ - 2 \square \\ \hline 459 \end{array}$